

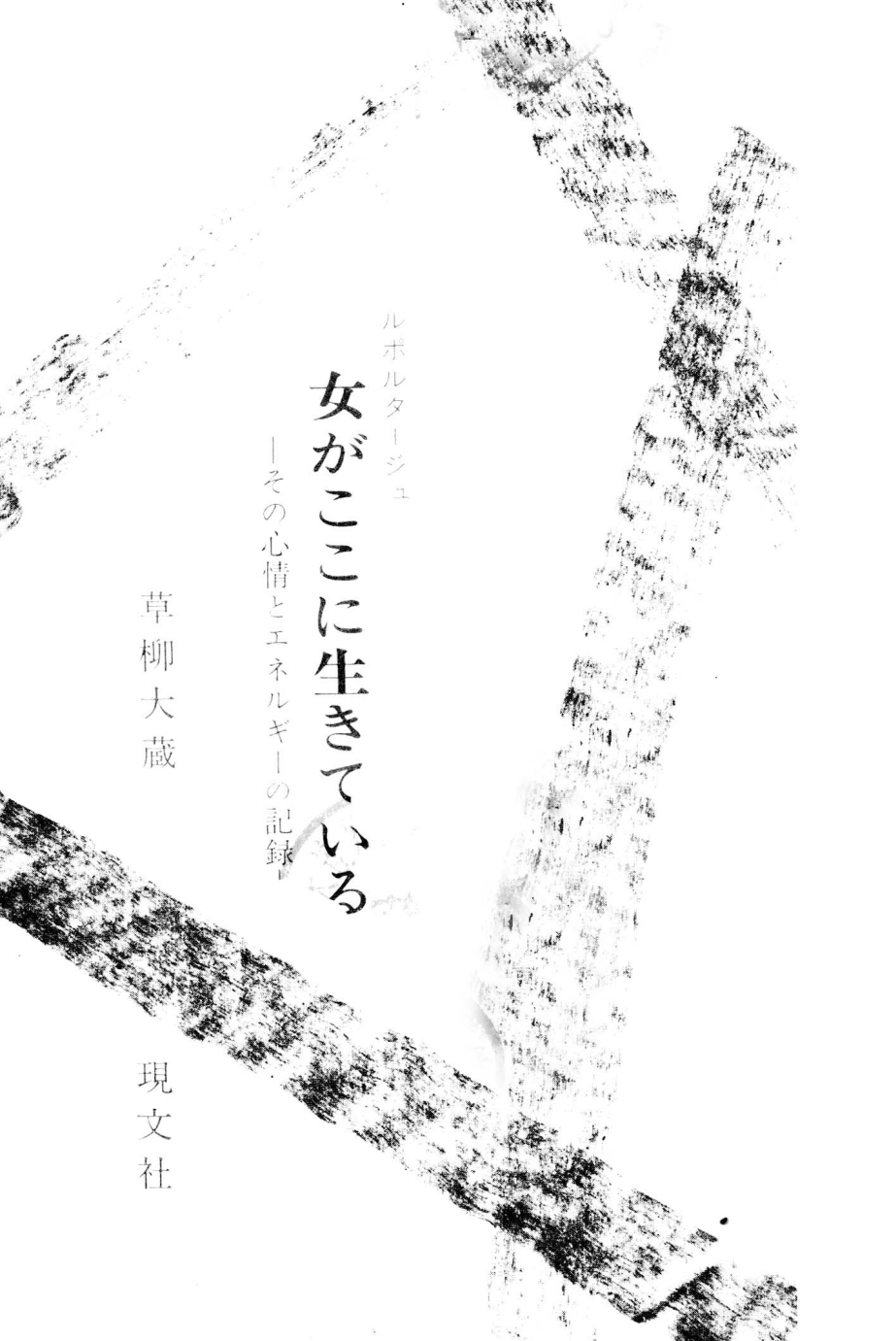
ルポルタージュ

女がここに生きている

—その心情とエネルギーの記録—

草柳大蔵





ルポルタージュ

女がここに生きている

—その心情とエネルギーの記録—

草柳大蔵

現文社

ルポルタージュ

女がここに生きている

昭和41年12月25日 初版発行

定価 420円

著 者 草 柳 大 蔵 ©

発行者 引 田 春 海

印刷者 木 内 愛 之 助

発行所 株式会社 現 文 社

東京都千代田区麴町5の3麴町マンション
振替東京 18439 ・ 電話 (261) 6588

印刷所 長 野 活 版

オフセッ
ト印刷所 文 華 印 刷

製本所 長 谷 川 製 本

乱丁落丁本はお取りかえ致します

ルポルタージュ

女がここに生きている

——その心情とエネルギーの記録——

まえがき

U子さん——。

『ミセス』と『装苑』に連載したルポルタージュが、本になりました。足かけ三年間、北海道から鹿児島まで、ずいぶん歩きました。校正刷りを読みかえしていると、吹雪の音や蟬しぐれが、活字の間から湧いてきます。

こんな経験はありませんか。夜汽車の窓から、ふと、夜の闇をみると、遠い人家の灯が瞬きながらゆっくりと過ぎてゆく、そのとき、「あ、あの人たちも生きているんだナ」と感じるのです。暖かくて、切なくて、いとおしいような感覚です。私がこの仕事であった女^{ひと}たちは、一様にそうした感じをそなえた人達でした。いってみれば「草の根^{グラス・レーフ}の人達」です。人生の舞台で、いちども花束を贈られたことも、脚光を浴びたこともない人達です。だが、まさに「草の根」のように、大地にしぶとく生き続け、花を咲かせ実を結んでいる。

U子さん——。

現代の女性論をひろってみると、「教育ママ」「よろめき夫人」「強妻」、こんなところが流行していま

す。とどのつまりは、「女の幸福は男次第」といったヒラキ直りの論理さえ聞かれます。たしかに、そういう面もあると思いますが、私にはそれが社会的な衣裳のように思われてなりません。そういう衣裳を脱いでもらって、女の人の実力といったものを、ヌードで眺めたいと思いました。私が男だからかな。そのヌードの観察記録がこのルポルタージュと思って下さい。

第一部の『女の命の火が燃えて』は、仕事ひと筋・その道一途に打ちこんできた女性の記録です。女一人、一本どっこい、掛け値なしの生き方に女の本質をみようと思いました。

第二部の『それでも生きて愛して』は、身体が不自由な女性達が、どんな生き方と愛を求めたかを、心の内側と外側から追跡しました。これは、彼女たちの「えんびつ軍記」でもあります。

第三部の『古い町の新しい女たち』、これは伝統・慣習・風俗といったものを、女性がどのように吸収し消化しているか、そのところを描いてみました。町を愛している人、町とケンカしている人、さまざまです。

結論からいうと「女性はやりつよい」です。強い、というより、インドの古語にある「母なる大地」という言葉そっくりです。日本の「大地」の持つ、逞しさ・愛しさ・素晴らしさを味わって頂ければ幸いです。さようなら。

* 今井田勲・平田富美子・福島京一氏をはじめ、本書を作って下さった方々に厚くお礼申しあげます。

昭和四十一年十二月

草柳大蔵

目

次

第1部 女の命の火が燃えて

酌婦・女中・妾の子、そして藍綬褒章

|| 網走の「あぐら婆っちゃん」一代記・中川イセさん ||

刺青野郎はこっちへ来い

|| 浜松の「ライオン先生」の30年・杉山春江さん ||

岩倉男爵夫人から大部屋女優へ

|| 小桜葉子と加山雄三を作った人・江間光括さん ||

六代目「絢屋吉平」の着物人生

|| 織り子の生命を伝えたい女・浦沢月子さん ||

千代紙人形に江戸の粋を守る

|| 四代目「いせ辰」夫人の哀歓・広瀬とみ子さん ||

糸繰りはなんたって滅びませぬ

|| 竹田人形座の歴史を守る・竹田ふくさん ||

「鍵善」復興にかけた女の愛着

|| 京おんなの典型といわれる人・鈴木愛子さん ||

若き学徒と古都に注いだ青春

|| 奈良「日吉館」の名物オバチャン・田村きよのさん ||

金糸をたどって生きた女の執念

|| 訪問着の高級刺繍を身につけるまで・前田春江さん ||

第2部 それでも生きて愛して

- 盲目の奴隷から独学への道・舟木令子さん……………一〇三
- 針一本のみ動かせる身体で・石塚千代さん……………一三
- 両脚のない山麓の雑貨店主・坂本とも江さん……………二三
- 聾啞の夫婦が愛憎に生きて・三塩ミヤノさん……………三〇
- 難聴の夫と歩いた山の記録・田中紀子さん……………三六
- 夫の手を拒まぬ菊の闇にして・葛愁花女さん……………四〇
- 白血病の子と化粧品の間・岩崎松子さん……………四六
- 上半身でつくった編物教室・小田雅枝さん……………五〇
- ポリオの身体でミシンを踏んだ・下関さだ子さん……………五七
- 盲^{めい}の風雪に琴の音を教える・斎藤吉子さん……………六五
- 原爆症の中で盲児を育てる・中井フミさん……………七〇
- 麻痺した手足で施設を建てた・羽山和江さん……………七四

第3部 古い町の新しい女たち

「神戸」素顔で買い物をする……………	二二七
「鹿児島」ジャンヌ・ダルクと大島つむぎ……………	二二四
「水戸」看護婦と貞女と薙刀と……………	二三三
「萩」ノウツメ型の萩女……………	二三七
「彦根」内面的なエネルギーをもつ近江女性……………	二四三
「六日町」春の雪と“機織りさま”の物語……………	二四九
「高知」いちずな女性とその周囲……………	二五五
「松本」議論好きな女性たち……………	二六一
「余市」“余市姫”をたずねて……………	二六七
「輪島」海士と漆と若い人と……………	二七四
「柳川」詩と敬語と教育ママと……………	二八一
「花巻」賢治と光太郎とつけ物と……………	二八六

第1部

女の命の火が燃えて

酌婦・女中・妾の子、そして藍綬褒章

——網走の“あぐら婆っちゃん”一代記・中川イセさん——

合気道三段、空手三段の婆っちゃん議員

網走の岬はいちめんの牧場である。緑の草がなだらかに起伏し、突端は断崖となって海とぶつかっている。海はオホーツク海だ。純白の島が、強く光り輝いて青い海に浮かんでいる。北のはてからきた流水である。白と黒のさんだらの灯台が、岬の突端にポツンと立っていて、北の海の話の静かに語っているようだ。

オホーツクの水平線を背にして騎馬が一頭駆けてくる。その馬にめん羊がびたりと寄り添って、大きな雲のうかんでいる空の下を、息せききつてついでくる。毛糸のかたまりが草の上をころがっているように見える。

「ハル子ちゃん」と、馬を止め、ひらりと降りた女性が言った。

「くらに油をやっておかんといかんね。堅くなって股が痛いよ」

彼女は、馬を優しくいたわると、牧草の上にどっかりとすわりこんだ。ひざのあたりに、紫色の小さな花が咲いている。

中川イセさん、六十五歳。網走の市議員を五期（二十年）にわたってつとめ、その間、最高点で当選すること二回。また、昭和二十四年から人権擁護委員として、多くの人をすれすれの状態から救い上げてきた。その功績でこんど藍綬褒章を受けたのであるが、彼女自身は「人が困っているときに相談にのるのはあたりまえ」と言って、法務省へ出す関係書類に手をつけようとさえしなかった。

網走では「市議員の中川さん」というより、「婆っちゃん」で通っている。その名の通り方がおもしろい。

ある夜、暗がりではアベックが襲われた。「婆っちゃん、たすけてくれ」と叫んだのは、騎士であるべき男性のほうである。網走の「婆っちゃん」は、このピンチを

耳にすると、寢床の中からガバとはね起き、はだしです
っとなでいく。大東流合気道三段、空手が三段の腕前な
のだ。婆っちゃんが来る、と聞くと、痴漢のほうやミ
クモに逃げていく。逃げないのは、よそから来た流れ者
で、やがては五尺足らずの婆っちゃんに投げ飛ばされる
のである。

現在でも週に一回は道場に行つてけいこをする。三段
だからけいこをつけるほうで、そのために、中川さんの
両腕には紫色のあざが点々と散っている。

愛馬婦人会から市議会へ

さて、中川さんは牧草の上にあぐらをかくと、嫁のハ
ル子さんの持つて来たじゃがいもを食べはじめた。北海
道のじゃがいもは甘みが強く、味に粘りがあってうま
い。オホーツクを渡つて来る風が初夏の空に鳴り、その
たびにベージュ色の芽をつけたからまつこのずえが、き
らりと光って揺れる。

ユースホステル協会長の中山正男さんが、中川さんの
このあぐら姿を見て「網走のあぐら婆さん」というあだ
名をつけた。

あぐらをかく理由はこうだ。二十四歳のころ、夫にっ

いて網走の岬にやつて来た。そこは原生林の間の小道を
たどりながら行きつくような場所だった。夕やみを歩く
と、朽ちたつがの木が燐を放つて燃え、巨人が赤く光る
衣をまとつて立ちはだかつているように見えた。いっ
ちいもよく燃えた。幹のあたりに燐の光をたもとのようにつ
けていた。夫は岬の広々とした台地で牧場を経営する計
画だった。彼女は夫のしようとすることを何でも覚え、
何でも実行しようと覚悟を決めていた。そこで、牧場
にはいると、真っ先に馬に乗ることを覚えた。彼女の背は
五尺そこそこである。目方も軽い。たちまち女流騎手に
なり、草競馬に出場して網走の男をアツといわせた。
が、残念ながら競馬では勝つたためしがなく、彼女の馬
券を買った男は、もう一度アツといったものである。そ
れは余談だが、乗馬ズボンにすっぽりと乗馬靴をはく
と、かしこまってはすわれない。あぐら以外には格好の
とりようがないのである。つまり、彼女が今日でも畳の
上であぐらをかくのは、乗馬時代の経験がいかに深か
ったかを物語るものである。

いや、中川さんと馬の縁はそればかりではない。網走
の岬の牧場の経験を生かして、彼女は女では珍しい「牛
馬商」の鑑札を手に入れた。馬のセリ市に立つて、男と

入札を競うのである。これで、かけ引きの勘と度胸を身につけた。やがて「馬車追ひ」の組合の旗頭となった。

荒くれ男に四の五のいわせず、かえって相談相手になってやれたのには彼女の柔道と空手がそれとなくものをいっていたのである。「馬車追ひ」の組合をあずかった彼女は、その家庭までひっくるめて「愛馬婦人会」というのを組織した。そろそろ日本が戦争にはいろうとしている時期である。「愛国婦人会」があるのに、愛馬婦人会がないのはおかしい」というのが趣旨である。

彼女はそこそこ三百ヘクタールを経営する大地主になっていたが、その一部分をさいて全部にんじん畑にし、そこからとれるにんじんを貨車に積んで、国家に寄付したものだ。また、戦争にとられていく軍馬が網走駅を出るとき、彼女は必ず、にんじんの袋をかついで見送りに行くのだった。知っている馬がいると、首を抱いて「生きて帰っておいでよ」と、むすこにでも言うようにくり返しながら、声をたてて泣いた。馬も涙をこぼした。彼女は貨車が見えなくなるまで駅頭に立ちつくすのだった。

戦後、彼女が市会議員に立候補できたのはこの「愛馬婦人会」の組織があったからである。彼女は「軍」に、

いや「軍馬」に協力したため追放を覚悟していたが、相手が馬であったからか、それは免れた。さらばと、中川さんは市会に立った。実は市会でも道議会でも国会でもよかったのだ。彼女は、敗戦によって古い日本がひっくり返ったときから、ひとつのことを絶叫したかったのである。

「女をなべかまのように使いやがって。家が貧乏ければ、女の子を売りに出しやがって。そんな社会ってあるもんか。女の悲しみがわからぬ社会はもうごめんだ」

網走の「婆っちゃん」はトラックの上から叫んだ。市民たちは婆っちゃんの涙の演説を、ある感動をもって聞いた。

婆っちゃんは自分の経験を語っているのだった。引き裂かれた女の運命をぶつけているのだった。婆っちゃんこそ前身は網走の赤線地帯に身を沈めていた女性のひとりだったから――。

親からほうり捨てられて

中川さんの半生は、溝にはいったボールが、どんなにもがいても溝の道どおりにころがっていくさまに似ている。

父親は「繭生系取引商」の看板を掲げてはいたが、それは表向きで、実は山形県の博徒の親分である。祭礼の夜にかねて目をつけていた庄屋の娘の器量よしを子分にかつがせて監禁した。その娘がみごもって産んだのがイセさんである。父親はイセさんが生まれたときは、別の新しい女と仙台にいた。それで母親は娘を里子に出すことにした。

「この子は私が願をかけて産んだ子だから、頼みます」と言い、後産がおりないのが原因でなくなったという。

したがって、イセさんには里子料が一銭もつかなかった。「飯を持ってこない里子」——それが戦前の東北の農家でどのように扱われるか、現代の若い女性には想像もつかないであろう。てっとり早くいえば、米というもののは一粒も与えられないのである。芋と葉っ葉だけである。ひどいときは、わらを煮て食べることもあるのだ。そして茶わんが割れても庭木の枝が折れても「イセがやった」ということになる。イセさんは人間ではなく動物なのである。

しかし、彼女は学校では抜群の成績だった。卒業するときは「総代」の位置にいた。ところが、学校はその栄誉を二位の娘に与えた。卒業式に郡長が来臨するので

「はかまのない子を総代にするわけにはいかない」という理由である。彼女は養家に帰ると、養母に「なぜ、はかまがないの」と泣いて訴えた。

——この記憶はイセさんの心の底にしみついているらしい。イセさんは「なぜ、はかまがないの」と泣きまして、それから子ども心に「はかまが文字を書くわけじゃないや、はかまが算術をやるわけじゃないや」と思いましたが、口惜しくて口惜しくて」と語りながら、今も涙を流すのである。世の「教育ママ」に録音して聞かせてやりたいくらいだ。

当時の小学校は四年まで。彼女は十一歳で実家に連れ戻された。父親は六人めの女を迎えていた。赤線にいた「鬼神のヨシエ」という女で、三百円で身受けしたものだ。青い手絡をかけた大丸髷を結び、かすりのきものをしゃきっと着た三十三歳の大年増である。その弟とイセさんをいっしょにさせようというのが魂胆だった。が、新しい母はさすがに「鬼神のヨシエ」で、イセさんが黒砂糖をひとなめしたのを摘発し、「あたしをバカにした」と父親に訴えたため、彼女は衿がみをつかまれて猫の子のようにはうり出された。ときに十三歳になっていた。「十三歳にもなれば牛や馬にも踏まれまい。かって